気がついたら朝鮮飯場

その頃までに私は、皿洗い、馬車引き、坑夫、新聞の外交、仲仕、カンカン虫、いろんな仕事をしてきました。朝鮮戦争の終りから何年間か、佐世保でアンコもやりました。

飯場も、平山飯場がはじめてというわけではありません。しかし、朝鮮飯場はここがはじめてです。

そのはじめての経験が、こんな風に知らずに飛びこんで、気がついたらそうだったというのが、一つの「アッ」です。

十八のとき、九州へ渡ってまだ一年とたっていなかったのですが、近くに新しく炭坑が出来ることになりました。

そのとき、測量の手元にやとわれました。

山岳測量です。こちらの谷間から、あちらのガケ、遠くの山やら近くのヤブと走り廻らされて苦労しました。測量が終ったら、事務員として採用するというのが最初の約束でした。旧制中学中退という学歴の私には、田舎の炭坑の事務員というのは、まア似つかわしい職業だろうと思われました。

或る日、

というのは、測量がほとんど終って毎日が手持無沙汰に思えるころでしたが、主任から「芝はぐり」を手伝え、といわれました。

「芝はぐり」

といわれても、当時の私には何のことか判りません。「渡世」の読者にもこんな言葉を知っている人は少いでしょう。

キョトン、としている私に、かたわらのベテラン坑夫が説明してくれました。

「芝はぐり」というのは、山の斜面を削って新しい坑口を開ける作業だ、というのです。

そして、更に続けていうのです。

「お前や、運のよか奴たい。芝はぐりのごたることは、この道何十年のベテラン坑夫でん一生に一度ぶちあたるか、あたらんかちう仕事ばい。考えてもみい。そぎゃん仕事は運のよからにゃ出来るもんじゃなかぞ」

(成程)

と思いました。生まれつきオッチョコチョイなところのある私は、ベテラン坑夫でも一生に一度ぶちあたるか、

あたらぬか判らぬ仕事が経験できるという幸運、あるいは光栄に好奇心をかからませて、二つ返事で引き受けました。

そして、三交替で作業が進められ、坑口らしいものが出来、化粧ワク(坑口に入れる特殊な丈夫なワク)が入り、と、気がついたら私はいつの間にか坑内で働いていました。初めの約束は忘れられたのか、いつまでたっても事務所からむかえにきません。そうして、まんまと坑夫になってしまったのです。

今度も、気がついたら朝鮮飯場です。

どうも私には、気がついたら、というのが多いようです。気がついたら仲仕、気がついたらバーテン、気がついたら皿洗い、いつも自分の意思とは半分以上無関係に、気がついたら何々なのです。

それにしても「気がついたら朝鮮飯場」というのが、少々ショックでした。

それまで、いろんな機会に「朝鮮飯場」の話をきかされました。佐世保のアンコ仲間にも、岡山の塩田工事の飯場仲間にも。

そういうときの話というのは、たいてい「朝鮮飯場」がどんなにヒドイ所か、という話なのです。

やれ賃金がやすいの、やれ食い物が悪いの、やれ汚いの、と、ろくな話はありません。

そして、そういう話をするときの仲間たちは、必ずといっていいくらい、朝鮮飯場ー朝鮮人を不当にさげすんでいるのです。

(朝鮮人だから悪い)

これにつきるのです。

(朝鮮人は軽蔑すべきだ)

これなのです。

理由なんかありません。朝鮮人は朝鮮人だからいけないというのです。それは更にすすんで、

(日本人のくせに、朝鮮飯場へなんか行く奴は人間の屑だ) こうなのです。

そんな話を聞く度に私は義憤を感じたものです。何ということを言うのか。朝鮮人も日本人も同じ人間ではない。理由のない差別をしてはいけない、と。

いや、まったく理由がないとはいえないでしょう。朝鮮は長い間、日本の植民地だったのです。

植民地の人間は軽蔑すべき者、朝鮮人はどれいと余り変らない人間、という考え方が、明治以来、日本人の心の底に深く強くしみこんでいました。そういう風に教育されてさたのです。

それが一朝一夕で変るはずはありません。
一方、朝鮮人にはどれいなみに扱われてきた恨みが、骨のズイまでしみこんでいます。
これまた、一朝一夕で消えるはずがありません。
戦前、戦中、日本の天皇政府は、朝鮮人もまた天皇の民なのだということを懸命に宣伝しました。そうしないと、朝鮮人を兵士として、労働力として使えないからです。だから、
「同じ天皇の民」
というのは表向きだけで、本音はやはり差別でした。
その証拠はいくらもあります。
そういうウソッパチの政治が、どういう結果をまねいたか。
日本人の心の中に、朝鮮人を軽蔑する気持をいつまでも残し、一方では朝鮮人の中に日本人をうらむ心をいつまでも残しました。
むろん、それが全部ではありません。現実はもっと多様に屈折し、人それぞれの心の中にそれぞれの陰影を作ったのでした。
私の父は――
と、またしても、話は横道にそれます。

私の父は、ニラ、ニンニク、唐辛子、塩辛など刺激のつよいものが好きでした。
イカの塩辛などを自分でつくりましたが、その自家製の塩辛の中に、真っ赤に色づくほど唐辛子を入れたりしました。
冬の寒い日、火ばちの灰の中にニンニクをいれ、焼き上ると、そのふっくらとやわらかくて、ピリリと辛い奴を、フーフー吹きながら食べていました。子供たちにも食べさせました。
朝鮮っぽい好みといえばいえるでしょう。
父は長崎県の北松浦郡の海べりの生れなのです。よく晴れた日には海の向うに朝鮮半島が見えそうな土地の生まれです。
もしかすると、父の血の中には、ということは私の血の中にも、幾代か前の朝鮮の血が入ってるのかもしれません。
物ごころつく頃から、私は漠然とそんなことを考えていました。そんな私には、どうしても朝鮮人を、ただ朝鮮人だというだけで軽蔑したり、憎んだりする気持は起きてこないのです。

「朝鮮飯場」について、悪しざまにいう仲間たちの話をきく度に、義憤を感じたのには、そういうこともからみます。
二十代の頃、ほんのゆきずりに終りましたが、ある朝鮮人の少女と結婚しよう、結婚したら、もしそうしなければならないのなら、自分が朝鮮国籍(韓国籍)になってもかまわない、と思ったこともありました。
行きずりの恋に、行きずりらしく、はかない結末となって消えました。今は思い出さえ遠くなりました。
それにしても、というか、
にもかかわらず、というか、
私が自分が朝鮮飯場にいくのをためらっていたのも事実です。
(朝鮮飯場は賃金が安い)
かもしれない。
(朝鮮飯場は食い物が悪い)
かもしれない。
(朝鮮飯場は汚ない)
かもしれない。
私は仲間たちが朝鮮飯場を悪しざまにいうのを聞く度に、一方でなぐりかかりたいほどの義憤を感じながら、

一方ではこの
(かもしれない)
を心の中で連発していたのです。
戦前、私の周囲にいた朝鮮人たちは、しいたげられていたが故に、みな貧しかったのです。
彼らの着ているものといったら、着物というよりボロキレでした。彼らの住んでいる家といったら豚小屋のようでした。彼らのそばへでると悪臭が鼻につきました。
その記憶はまだ消えていません。
朝鮮飯場は、賃金が安く、食い物が悪く、そして汚いだろうという想像は、そういう記憶と結びつきました。
ありうることだ。たぶんそうだろう。きっとそうに違いないと思うようになりました。
しかし、ただそれだけなら、「朝鮮飯場」行きをためらう理由にはなりません。
十代から二十代にかけて、私は貧乏の苦労をいやというほどなめました。
すむところがなくて、防空壕の中にもぐりこんで暮したこともあります。宵カンもたびたびでした。何日も食べる物がなくて、道に落ちているパン屑をひろったこともあります。アメリカ軍の残飯オケに首をつっこんだこ

ともあります。

そんな私に、賃金が安い、食い物が悪い、飯場が汚いは、「朝鮮飯場」入りをためらう理由にはなりません。

むろん、少しでも賃金が高く、食い物もよく、きれいな飯場に、どうせなら入りたいと思うのは人情ですから、私だって二つならべて、どちらかといわれたら、少しでも条件のよい方へいくでしょう。

でも、いつか一度は「朝鮮飯場」も経験したいと思っていました。そういう機会があればと思っていました。

言っていることが、前と後と、いろいろ食い違うようですが。

一度は経験したいという気持は、ただの好奇心だけでなく、朝鮮人を差別することへの怒りから、私は進んで朝鮮人と同化したいという(チョット宗教的かもしれません)気持ちでありました。

そして、そうであってなお、まだためらう気持ちがあったのです。

それは、少し年をとって、いろいろ世の中のことが判ってくると、習慣の違いということが目につきはじめたからです。

習慣の違う世界にいきなり飛びこんで、それになじめるかどうか、だんだん自信がなくなってきたのです。

私はもう三十才になっていました。それだけ自分の人生を、自分の色にそめてしまっているのです。若い頃のような、何にでも向う見ずに飛び込める無鉄砲も、どんな色にもそまりやすい白紙のような純粋さも、もうなくなっています。

若い頃、私は左翼の運動も少しばかりやりました。マルクスだの、毛沢東だの、夢中で読んだときもあります。

しかし、三十になった私はもう、ただやみくもに観念的な若者ではないのです。

「民族差別反対!」

と叫んで、英雄主義者みたいに、「朝鮮飯場」へとびこむなんて、そんな青臭さはなくなっているのです。

ところが、「気がついてみたら朝鮮飯場」なのでした。

松本親方

松本組の飯場は四つあって、そのうち平山飯場だけが、はなれた所にありました。ゴミゴミした町中で、百メートル以上もはなれているのです。